

# 地域との協働を重視した総合的な学習の単元デザイン

三浦一郎（姫路市立手柄小学校）・長谷川香里（大阪大学大学院）

概要：本研究では、まちづくり分野の総合的な学習の単元とそれを支える地域を巻き込んだ共同体のデザインを提案することを目的とする。まちづくり分野の学習を行うには、地域との協働が重要である。しかし、従来「外部の人的リソースの活用」については、学校側のニーズ即した活用が多く、地域にとって学校と協働することの意味やメリットについて、協議された上で単元がデザインされることは少ない。そこで、本研究では、教師と地域協働コーディネーターが地域の様々な関係者と共に学習に関わる体制を築くプロセスに着目し、地域・学校相互が、主体-主体の関係性を基盤とした実践共同体を構築する単元デザインについて報告する。

キーワード：実践共同体, 社会に開かれた教育課程, 地域学校協働活動

## 1 はじめに

平成29年3月、新学習指導要領が公示され、資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」が重視されるとともに、それを社会と共有する「社会に開かれた教育課程」の重要性も強調された。総合的な学習の時間（以下総合学習）においては、地域の素材や学習環境を積極的に活用することが期待されている。教員以外の専門スタッフも参画した「チームとしての学校」の実現を通して、複雑化・多様化した課題の解決に取り組んだり、時間的・精神的な余裕を確保したりすることも求められている。美馬・山内（2005）は学習環境をデザインするための三つの視点として「空間」「活動」「共同体」を提示している。総合学習における単元デザインは、「活動」のデザインが主となっており、「共同体」については、その重要性を主張するに留まっており、その構築のプロセスの具体は描かれることは少ない。

## 2 研究の目的

本研究では、小学6年生の総合学習（まちづくり単元）において、単元を支える実践共同体の構築プロセスに着目する。学校と地域社会が密接に連携しながら実現する単元デザイン（特に共同体のデザイン）のプロセスを検討する。単元計画の概略としては、子供達がまちに対して抱いた疑問を、関心ごとのチームに分かれて調査し、まとめ、自分たちの考えを踏まえた上で「まちの未来」の姿として住民や保護者に提案するというものである。

## 3 研究の方法

本研究では、教員、児童、コーディネーター、地域住民、自治会、公民館など本単元に関わる多様な関係者が、総合学習の実現に向けてどのように連携が進んでいったのかについて、アクションリサーチの方法を用いて、そのプロセスを具体的に記述し、地域学校協働活動に必要な知識や技能、態度を明らかにしていく。

## 4 実践の視点とその結果

### (1) コーディネーターの存在

単元の構想段階より、市内で市民活動を実践し多様なネットワークを生かした地域と学校の連携を構想していた長谷川と協働し、長谷川をリーダーとするチームを実践共同体におけるコーディネーターと位置付けた。

### (2) 共同体デザインのプロセス

本年7月後半より関係各所に足を運び、本地域学校連携のあり方を模索してきた。象徴的なやりとりが行われた事例を報告する。

#### ① 校区の自治会との連携

構想の初期段階に校区の連合自治会長に経緯の説明を含め、密に連絡を取り合ってきた。趣旨に賛同いただいた連合自治会長から「自治会長会で趣旨説明を行わないか」との提案を受けた。会では概要の説明後、「授業サポーターの役割は何なのか。」など様々な意見が飛び交ったが、最終的には了承された。共同体を形成、維持するには自治会町会の理解が欠かせ

ないという連合自治会長自らの判断により、連携の基盤作りが進んだ。

## ②PTA との連携

PTA 会長の職場に出向き協力依頼したところ、快諾いただいた。説明時に持参した児童らの疑問から、会長は自らの記憶や経験を思い起こし語る時間があつた。同じまちで育ったから住民であるからこそ、まちの歴史と関連づけることができる。PTA の方々には保護者であると同時に、まちの先輩としての役割を担ってもらいイメージが広がった。

## ③姫路市まちづくり振興機構（以下機構）との連携

長谷川と市の担当部署の協議から今回のプロジェクトを知った機構職員から協力の申し出があつた。校区内にある公園の管理運営において地域連携が重要だと感じていた機構は、本実践の趣旨や総合学習を通じた地域連携に共感し、協働することとなった。本実践において、共同体をデザインする視点を持ち、連携の門戸を開いておいたことが連携につながった。

### (3) 「一情報源」から「メンバーの一員」へ

これまでの外部人材の活用の主流は、ゲストティーチャーとしての招聘である。そこでの関わりは、学習リソースとしての「一情報源」としての意味合いが強い。しかし、本実践では、外部人材を実践共同体の一員として参画してもらう。そうすることで、単元全体を通しての目標を筆者らと共有したり、外部人材の参画の在り方について共に考えたりする関係性を構築していった。

### (4) 現段階での実践共同体の構成と役割

本実践では、下記のような構成と役割で実践共同体を組織した。

表1 実践共同体の構成と役割

構成	人数	役割
6年生児童	93名	学習の主体
教諭	5名	授業の構成 学習環境デザイン
サポーター	20名	児童の見守り、学習のサポート、地域情報の提供
コーディネーター	4名	関係者間の連絡・調整

## 5 考察

総合的な学習の単元を支える実践共同体の構築過程について、その特徴的な部分を中心に報告してきた。

総合的な学習の単元を支える実践共同体を構築していくことは、具体的には教師が地域へ足を運んで、地域の方々と直接関係を取り結んでいくことである。それが、地域の様々な人々や団体と新たに関係を築いていくことになる。さらに、そこで築かれた関係は、総合学習に留まることなく、学校の様々な教育活動に波及していくと考えられる。

## 6 今後の課題

### (1) 成果

本実践は、姫路市提案型協働事業において採択され、学習活動に関わる経費の確保ができた。今後全国的に展開されていくことが推進されている地域学校協働活動が制度として運用される際の示唆となるような知見を得ることにつながると考えられる。

### (2) 課題

本実践の想定する実践共同体のイメージを共有することは困難が伴った。総合学習の授業作りへ地域人材が参画する事例が身近になく、他の教員にとっては役割のイメージが理解しがたい部分があるからである。総合学習に授業作りに関わる教員や地域の方々が一同に会して、互いの役割について共有する場の設定が重要である。

2学期、本単元を実施していく中で、実践共同体としてやりながら考え、振り返り、継続的にデザインし直していきたい。

## 参考文献

- 文部科学省(2017) 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編  
矢守克也(2009) 防災人間科学, 東京大学出版会  
美馬のゆり, 山内祐平(2005) 「未来の学び」をデザインする, 東京大学出版会  
文部科学省(2017) 地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン